ルニ依リ倉庫狹隘ヲ告ゲ之ヲ堆積スルノ已ムヲ得サルニ至レリ

若シ之ヲ陳列館内ニ排列シテ在校生徒ニ示スノミナラズ博ク内外ノ来観者ニ示スコトヲ得ハ物品保存ノ途立ツノミナラズ學校技術ノ功程ヲ公示スルニ足ルモノアルベシ　由是観之美術學校本然ノ効用ヲ完全ニ収メンカ爲ニハ陳列館新築ノ必要ナルコト明ナリ

雑件

生徒實験ノ資ニ供スルタメ諸所ノ依嘱ヲ受ケ製作ニ従事シタルモノ、中重モナルモヲ擧クレバ左ノ如シ

依嘱製作品一覧

品名	數量	受託年度	本年度内竣工未竣工ノ区別	依嘱者
乾漆製婦人胸像	一軀	本年度	竣工	暹羅公使
實吉軍醫総監銅像	一軀	同	同	海軍々医会 高橋三郎
優勝旗	一式	同	同	吳鎮守府 狹間光太
石膏製屋上装飾神像	一軀	同	同	五二共進会 中澤彦吉
木彫欄間	一式	同	同	佐久間栄太郎
木彫聖観音原型	一軀	同	同	岡田良平
岡田良一郎銅像	一軀	同	同	山崎覺次郎
長岡護全騎馬銅像	一基	同	同	米田虎雄
繪畫額面	二面	同	同	佐藤友熊
古川久吉銅像	一軀	同	同	田代平五郎
西村勝三銅像	一軀	同	同	大澤省三
松島清八銅像	一軀	同	同	本田留吉
厨子入純金製佛像	一軀	同	同	鈴木九一郎
卓上電燈用	四軀	同	未竣工	英国サミュル夫人
青銅製婦人像	三對	同	同	曽我日本鉄道会社長
朧銀製花瓶	一基	同	同	德川華族會館長
飾棚	三十對	同	同	高橋日本勧業銀行総裁
銀製花瓶	五千弐百七十九箇	同	同	農商務省
府縣聯合共進会賞牌	一面	同	同	尾崎東京市長
東京全市模型	一式	同	同	千家東京府知事
東京勧業博覧会場内噴水彫刻	二軀	同	同	尾崎東京市長
日本橋雛形装飾彫刻人物	一式	本年度	未竣工	千家東京府知事
東京勧業博覧会場内工藝館ニッチ彫刻人物	一軀	同	同	野村宗十郎
松田源五郎銅像				

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術學校近事〔四巻—四号。M・三九・一年・一月・一九日〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜を錄すれば左の如し。

明治三十八年十一月廿五日、辻村〔延太郎〕教授正八位に敍せらる。

同月二十九日、辻村教授休職を命ぜられたり。

同月三十日、助教授中尉羽田禎之進氏、勲七等に敍し、瑞寶章を授けらる。

十二月五日、増井〔兼吉〕雇は一等計手に昇進せられたり。

同月六日、雇佐々木丸治氏依願解雇せられたり。

同月八日、竹内〔久一〕教授は戰捷紀念聖觀音銅像原型製作擔任を

命ぜらる。
同月十一日、教授下村晴三郎氏、歐洲より歸朝せらる。
同月十五日、石田英一氏は、本校雇を命ぜられ、金工科助手を申付けらる。
同月廿一日、囑託阪口肫、同中村勝次郎〔治〕、同水谷鐵也、鶴田幾太郎の四氏、各本校助教授に任ぜらる。
同月二十二日、教授海野勝珉氏は、勲六等に敍せられ、瑞寶章を授けられたり。
同月二十三日、教授大澤三之助氏は高等官五等に、同下村晴三郎寺崎廣業の兩氏は高等官六等に、何れも陞敍せられ。〔ママ〕教授藤田文藏氏は依願本官を免ぜられたり。
○卒業生生徒の檢定試驗合格　文部省に於て本年施行せし、師範學校中學校高等女學校の圖畫教員（毛筆畫用器畫）檢定試驗に合格したるものゝ中、本校に關係あるは左の如し。
熊本縣士族　高木左直（日本畫科第二年）
宮崎縣士族　益田珠城（日本畫撰科卒業）
宮崎縣士族　菊池整吾（圖畫講習科卒業）
○校友會恤兵展覽會へ賞賜　先年日露戰爭の際、陸海軍へ恤兵費寄附の目的にて、昨年四月本校校友會に於て展覽會を開き、陸軍へは金四百圓と紀念繪葉書千五百組（一組二枚）を、海軍へは金一百圓と繪葉書百組（一組五枚）ハンカチーフ五十枚を寄贈したるが、十月一日付を以て舊臘に至り、左の賞狀及木杯一組（三ツ組）宛を賞賜せられたり。

東京美術學校校友會恤兵展覽會總代　　正木直彦
　　高村光雲

明治三十七八年戰役の際報國の旨意を以て恤兵費の內へ金四百圓寄付候段奇特に候條其賞として木杯壹組下賜候事
明治三十八年十月一日
東京府知事正三位勲三等男爵千家尊福
（海軍の分も同一文面に付署す）

○懸賞圖按の受賞　先頃日本廣告社に於て大和火災保險會社の廣告圖按を募集したるが、本會員（圖按科三年生）の仙石貫造氏は之れに應じて、一等賞に當選し、懸賞金百圓を受領したりといふ。
○陸軍の歡迎　昨年十二月十七日、東京市に於て、滿洲凱旋軍の凱迎會を上野公園に催されしに付、本校職員生徒一同は、公園入口袴腰に建設せられたる凱旋門の內側に整列して、歡迎の意を表したり。
○職員の歡迎會　本校教授大尉大澤三之助助教授中尉石井吉次郎の兩氏は各凱旋せられ、教授下村晴三郎氏は歐洲より歸朝せられたるを以て、本校職員一同は三氏を歡迎するの主旨にて忘年會を兼ね、客歲十二月二十一日梅川樓に於て宴を開けり。會するもの五十餘名にして、近來稀なる盛會なりき。
○依囑の銅像と原型　本校に依囑せられたる西村勝三氏銅像は、此程大半鑄造を終り、遠からず出來すべく、故長岡中尉の銅像原型は既に其製作を終りたるを以て、不日鑄造に著手すべし。
○職員の旅行　職員諸氏にして、年末歲始の休暇を利用し、旅行せられたる諸氏を擧ぐれば、黑田〔清輝〕久米〔桂一郎〕の兩教授並

に中村〔勝治郎〕助教授は豆州船原溫泉地方へ、岡田〔秀〕助教授は豆州を一週するの目的にて、囑託合田清氏は房州地方へ、島田〔佳矣〕教授は豆州熱海へ、和田〔英作〕教授、小林〔万吾〕助教授は靜岡縣下清水へ、白山〔松哉〕教授は修善寺へ、大村〔西崖〕教授は鄕里岩淵へ、黑岩〔倉吉〕助教授は逗子地方へ赴かれたり。

○職員の年賀交換會　同會は例の如く、一月一日午前十一時より校内に於て開かれ、年賀交換を爲したる上一同食卓に就き、二時頃散會せり。會するもの四十餘名。

○授業始めの式　一月八日例により其式を施行せらる。今次第を記すれば、日本畫科第四年教室を式場とし、正面に　御眞影を奉掲し、正木校長の告辭ありて後、職員一同　御眞影を奉拜し、次で校長は勅語を捧讀し、萬歲を三唱して式を終へたり。

○京都美術協會の展覽會開設　同會に於ては京都市の補助を受け、本年四月一日より展覽會を開設するの趣にて、其勸誘書及規則を添へ左の依賴狀を本會へ送り來れり。依りて今玆に依賴狀及規則中の重もなる點を左に拔抄せん。

拜啓　今や曠古の大戰も平和克復し國威の發展するに伴ひ國家の富源を增進するは實に今日の急務に付我美術協會は玆に鑑み美術及美術工藝を一層奬勵するの必要を感じ來る四月一日より五月廿日迄京都市岡崎町美術館に於て第十一回新古美術品展覽會を開設致し候間貴會に於ても其趣旨の存する所を察せられ會員諸氏の美術製作品出品勸誘の義御盡力被成下度別紙規則書及勸誘書等相添へ此段御依賴旁及御照會候也

明治三十九年一月五日

第十一回新古美術品展覽會規則拔抄

第二條　本會は明治三十九年四月一日より五月廿日迄五十日間京都市上京區岡崎町美術館に於て開設す

第三條　本會は館內階上の東部及階下を新製品陳列室とし階上西部を參考品陳列室とす

第四條　本會の出品は左の部類に依る

第一部　繪畫　第二部　圖案裝飾畫

第三部　彫刻（木、竹、牙、介の類）及塑像

第四部　陶磁器　第五部　漆器蒔繪

第六部　金屬七寶　第七部　織物、染物、刺繡

第八部　各種工藝品

但猥褻戲狂に係るもの及び內外國博覽會等に出品し審査を受けたるものは謝絕することあるべし

第五條　本會に出品せむとする者は目錄二通を製し二月一日より同月廿日迄に上京區岡崎町美術協會事務所へ差出すべし

（出品目錄書式）

住　所

出品人　氏名

番號	物名	數量	圖題	質	考案者及製作者	賣品は價格非賣品は其旨を記すべし

右出品候也

年月日　　右　氏　名　印

京都美術協會御中

（注意）付屬品、臺、包裝等の類あれは其旨を下欄へ必ず記し置くべし

第六條　本會へ出品せむとする者は現品を三月十日より同十五日迄に美術館內事務所へ差出すべし

第八條　同種類の出品は一名三點を限るものとす

但繪畫は一名二點までとす

第十一條　繪畫の出品は總て枠張又は假表裝等を要す　但遠隔の地方にして運搬不便なる出品に限り本會に於て枠張等を引受けることあるべしと雖も其費用は自辨たるべし

東京美術學校近事〔四—五。M・三九・二・十二〕

○結城貞松氏の除隊　同氏は一月六日、愈召集を解除せられたるを以て、從前の通り本校日本畫科にて教鞭を執られつゝあり。

○羽田禎之進氏の解隊　同氏も一月十三日解隊せられ、同月十七日上野着の滊車にて凱旋せられ、從前の通り躰操受持並に教務掛主任の職務に就かれたり。

○千頭庸哉氏の凱旋　同氏は一月十四日午前十時四十九分新橋着の滊車にて、第三軍司令部員と共に凱旋し、同月二十日解隊せられ、本校圖案科助教授の職に就かれたり。

○本校一覽の配布　明治三十八年より同三十九年に至る本校一覽は、一月中旬刷了したるを以て、同月二十日卒業生諸氏へも發送せられたり。

○白山〔松哉〕教授　同氏は一月二十七日正七位に敍せられたり。

東京美術學校近事〔四—六。M・三九・三・一〕

○職員諸氏の出張　正木〔直彦〕校長始め、職員三氏の出張を記せば左の如し。

黑岩〔倉吉〕助教授は、依囑製作事業に關し、一月二十七日より五日間を以て、靜岡縣下掛川へ出張せられたり。

正木校長は、二月九日より二週間の見込にて、京都大坂の二府、奈良香川の二縣へ出張せらる。

關〔保之助〕囑託、香取〔秀真〕囑託の兩氏は、學術研究のため、十日間の見込にて、京都大阪の二府及奈良縣へ向ひ、二月九日出張の途に上られたり。

○職員の東北凶作地救恤寄付金　標題に示すが如く寄付金をなさんとて、目下協議中の由なるが。其額は各自俸給月額百分の一づゝにて計金參拾圓なりといふ。

○西洋畫科の東北救恤寄付金　西洋畫科にて先年日露戰役中恤兵展覽會を開きて、其收益金を恤兵部に寄付したるは、當時記したる如くにして、猶其後の恤兵展覽會開設の基金として、蓄へたるものありたるか、既に平和克復の今日其必要もなくなりたる折柄、恰も東北地方に悲慘の事起りたるを以て、右の內より金五拾圓を支出し、其救恤寄付金として、一月二十九日時事新報に託したりといふ。

○本校化學室の改造　本校化學室は從來鑄造科の一部を以て之に充てられありしが、久しく獨逸國等に留學し、工藝化學の道を研鑽せられし大築千里氏が昨年歸朝せられ、本校化學擔任の教授として、

就任せられしを以て、從來の工藝塑造教室に大修理を加へ、こゝを工藝化學實驗室及教員室、講義室とし、水道を引き瓦斯をよび、或は其他必要の施設をなしつゝありしが、此程大略完成したり。

○職員送迎會　本校助教授結城貞松、羽田禎之進、千頭庸哉の三氏はそれ〴〵先頃凱旋せられ、又教授藤田文藏氏は先般辭職せられたるを以て、職員一同は右四氏の爲に、一月三十一日日本橋區元大工町の菊隅樓に於て送迎會を催したり。近來稀なる盛會にして、會せしもの六十名を缺く僅に二名。

○專門學校入學者撿定試驗　明治三十七年四月東京府令第二十八號に依り、東京府にては本年四月、府立第一中學校に於て、專門學校入學志願者のために、試驗撿定を行ふよし。

○岩村〔透〕教授の襲爵　同教授の嚴父高俊男は舊臘薨去せられしを以て、二月十二日付にて、同教授へ襲爵の命下れり。

東京美術學校近事〔四―七。M・三九・三・三一〕

○職員の陞敍　二月二十日付を以て職員中大澤、寺崎、下村、岩村の三氏は左の如く陞敍せられたり。

敍從六位　教授　正七位　大澤三之助
敍正七位　同　從七位　寺崎　廣業
敍正七位　同　從七位　下村晴三郎
敍正五位　同從五位男爵　岩村　透

○石井助教授の解隊　助教授、中尉石井吉次郎氏は、二月廿一日召集を解除せられ、漆工科助教授の職に復されたり。

○科外の語學　從來本校科外に於ては、英語、佛語、伊語の諸科を置きて、講習志望者の便を圖りしが、今回更に科外に獨逸語科を置き、大築〔千里〕教授の擔任にて、毎週火曜、水曜の兩日に於て、二月の末より授業を開始せり。

○音樂部及寫眞術の研究會　兩三年來校友會員の宿志なりし音樂部の設立は、日露戰役のため躊躇せしが、昨年末より實行せられ、音樂學校より教師を聘して、爾來其研究をなしつゝあり。今又寫眞研究會を起して、有志者の研究に資せんとし、大築教授之が指導の任に當ることゝなり、會員の心得等も脫稿したれば、不日研究會を開くの運びなりといふ。

○東嶺先生書牘　本書は本校卒業生なる故後藤矩一氏の戰沒紀念として、戰爭中同氏往復の書簡を集め、印刷に付して小册子となし、元同氏の奉職せし神奈川縣第三中學校校友會より發刊し、本校へも寄贈せられたり。其厚意謝する所なり。

○留學中の白濱〔徵〕教授　同氏は昨年末英國より佛國へ轉學し、目下同地に留學中なるが、來四月よりは獨逸へ轉學の見込なりといふ、現今宿所左の如し。

c/o Japanece Legation,
75 Avenue Marceau,　Paris.

○本年本校の卒業式　本校の卒業式は從來毎年七月の初に於て擧行せられしが、昨年規則を改正し、卒業期（即五學年）を二學期とし、三月に終ることゝなりしを以て、本年以後は從て四月初めに於て卒業式を行ふことゝなり、本年は來四月二日擧行の事に決定したり。

○中學校其他教員檢定出願者の注意　本年二月二十日文部省令第二十號を以て、師範學校、中學校、高等女學校の教員檢定試驗を行ふべき旨告示せられ、同月二十一日の官報公告に於て、出願者の注意すべき詳細の事項を公告せられたり。今玆に告示第二十號及公告の要領を記せば左の如し。

受驗者は本年五月十五日までに、明治三十三年文部省令第十號（明治三十四年同省令十二號、同三十六年同省令二號參照）教員檢定に關する規程第四條に依り願書を地方廳に差出し、地方廳は六月十日までに、文部省に進達すべし。

受驗者にして豫備試驗受驗地を變更せんとするときは、新に受驗せんとする場所の屬する地方廳を經由して願書を差出すべし。但し七月十一日以後文部省に到達の分は之を受理せず。（以上告示二十號拔抄）

教員試驗檢定の豫備試驗は、北海道廳の支廳及臺灣に於ては之を行はず。

豫備試驗は本年八月。修身、教育、數學、物理及化學、博物、圖畫、家事及裁縫、躰操、音樂、農業、手工科の本試驗は同十一月。國語及漢文、英語、歷史、地理、法制及經濟、簿記、商業科の本試驗は明治四十年二月之を行ふ。（以上公告拔抄）

右の外詳細を知らんと欲するものは、前記二月二十日の省令二十號と、二十一日の公告にある出願者注意事項を一讀せらるべし。

（編者附記）

〔補遺、「三月二十日　教授久米桂一郎ニ予備科仏語担任ヲ命ス」（職員辞令メモ）〕

東京美術學校近事〔四―八。M・三九・五・六〕

○職員の出張　教授大澤三之助氏は、學術實地指導のため、一週間の見込にて茨城縣下へ出張を命ぜられ、別項にも記せる如く圖案科三年生九名を率ひて、四月三日水戸市へ出張せられたり。

○帝室技藝員の任命　本校教授竹内久一、同白山福松の兩氏は、四月四日各帝室技藝員を命ぜられたり。兩氏のため慶賀すべきことゞもなり。

○圖案科生徒の實地研究　今回本校に於ては、大澤教授指導の下に圖案科第三年生九名に旅費を補給して水戸市へ出張を命じたるを以て、四月三日一同出發したり。其重なる目的は、水戸常盤公園の好文亭を實測研究せしむるに在りしと。

○第十五回卒業證書授與式　本校第十五回の卒業證書授與式は、四月二日午前十時より本校に於て擧行せらる。今當日の概況を錄すれば、正門には國旗を交叉し、玄關には下足の準備なども亦整ひぬ、校内に在りては職員食堂を修飾して、大臣及各學校長の休憩所に充て、日本畫三年教室には、壁間に日本畫科諸先生の作及從來の卒業製作などを懸けて、保證人其他の來賓休息所とし、又第二講義室を以て前卒業生及職員の休息所となし、式場は例の如く日本畫科四年教室と定められたり。午前十時數點の號鐘と共に一同式場に入り、先づ正木〔直彦〕校長は學校に於ける生徒の現況等に關して、一場の演説をなし、順次卒業生に卒業證書を授與し、尋で復た正木校長は卒業生に對して告辭を陳べ、了りて牧野〔伸顯〕文部大臣祝詞を

朗讀し、卒業生總代中久木富二郎氏答辭を述べて式全く畢り、それより招待諸賓は教室に陳列せる卒業製作及生徒成績品を觀覽し十一時半の號鐘を以て、諸賓一同食堂と定めたる會議室（元校友會倶樂部）に集りて麥酒、鮨、サンドウヰッチ、菓子等の饗應を受け一時少し前退散せり。此日春色駘蕩朝來の雨全く霽れて天氣殊に麗らかに、庭内の楊柳はすが〳〵しく綠の眉を伸べ、滿山の櫻花はにこやかに薄紅の唇を開きて笑ひ初め。我校に集り來るまろうどを迎ふるに髣髴たり。さればにや賓客の數は常の年にも勝り、大臣を初めとして保證人前卒業生の諸氏を併せて百人許と註せられ、此外職員及新卒業生諸氏を合すれは、二百人にも餘りしと見受けられたり。而して大臣の祝詞及卒業生の姓名を錄すれは左の如し。

卒業生科別一覽

科名		卒業生
日本畫科	本科	……八
	撰科	……三
西洋畫科	本科	……五
	撰科	……九
彫刻科	本科	……二
	撰科	……三
圖按科	本科	……五
	撰科	……一
金工科	本科	……一
	撰科	……三
鑄造科	本科	……〇
	撰科	……一
總計	本科	……二一
	撰科	……二〇

卒業生姓名及卒業製作品目錄

日本畫科

春宵	本科	大村 友雄	石川平
景清	同	西村喜三郎	大坂平
幽寂	同	水上 泰生	福岡士
露	同	橋爪成一郎	石川士
かぐや姫	同	後藤 茂啓	靜岡士
少女	同	小沼 直	長野平
秋景	同	平山 謙一	東京士
卒業後再入學ニ付實技ヲ課セズ	同	鈴木 雪哉	栃木平
晩秋	撰科	平田 榮二	山形華
秋暮	同	水谷 四郎	長野平
運命	同	平木彌一郎	石川平

西洋畫科

自畫肖像	本科	人見 雪彦	京都士
自畫肖像	同	辻 永	福岡平
自畫肖像	同	森田龜之輔	東京平
自畫肖像	同	江南 武雄	北海平〔ママ〕
自畫肖像	同	西 三雄	東京士
自畫肖像	撰科	森田 恆友	埼玉平
自畫肖像	同	山本 鼎	愛知平

自畫肖像　同　野口　峯吉　長崎平
自畫肖像　同　村上　爲俊　愛媛士
自畫肖像　同　高島　七郎　福井平
自畫肖像　同　大給　近清　東京華
自畫肖像　同　岡　直路　岡山士
自畫肖像　同　大槻　弐雄　東京士
自畫肖像　同　今關　胤雄　千葉平

彫刻科

老人　本科　畑　正吉　富山士
水鏡　同　田中　雄一　香川平
蹄鐵工　撰科　川上　邦世　東京士
秋　同　服部喜一郎　山形平
浴後　同　田中　良雄　東京平

圖按科

本邦各時代様式應用置時計圖案　本科　人見　鐵三　滋賀士
洋風寢室内装飾圖案　同　山田喜三郎　佐賀士
洋風別莊建築圖案　同　森垣　榮　兵庫士
本邦各時代應用染織摸様圖案　同　松川第八郎　新潟平
婦人用衣服及携帶品一式圖案　同　中久木富二郎　東京士
七五三祝着衣服圖案　撰科　磯野富之助　富山士

金工科

黄銅製芭蕉翁像　本科　木村第一郎　東京士
銅製硯屏文章星ノ彫　撰科　藤島　三郎　福岡士
朧銀製花盛器　同　濱野鶴三郎　東京平
朧銀製香爐銘玉川　同　白鳥　茂昌　東京士

鑄造科

青銅花盛器　撰科　鈴木　清　東京士

以上　計　四十一人

文部大臣祝詞

東京美術學校第十五回卒業證書授與式を擧ぐるに方り諸子の卒業を祝して一言する所あらんとす。惟ふに美術の淵源は遼遠にして、其前途は津涯なく、美術家の任務重且大なり。我國の美術及美術工藝は近時其進歩の蹟漸く見るべきものあらんとす。然りと雖美術界の全躰は、未だ國家の盛運に伴ふに至らず、尙大に發達を要するもの多く、將來新進の手腕に待つもの尠しとせず、特に今や戰后我國の威武四方に揚がると共に、美術工藝の精華亦一段の光輝を發揮すべき時に方り、諸子卒業の榮を荷ひ、是より出でゝ斯界に立たむとする諸子忍耐恆久、其修得せし所に其き、深く講究練磨を加へて其大成を期し、以て時勢の要求に副はむこと、是本大臣の諸子に望む所なり。

○日本名畫百撰の發行　本校に於ては嚮に本邦名畫百撰を編纂し、美術上並に一般各學校の圖畫教育上に貢獻するの主旨にて出版するの計畫ありしが、其の挿畫を新に製版せんには、非常の高價となるを以て、先頃京橋新肴町十三、審美書院よりの申出を許可し、同院〔所〕書藏の種版を用ひて同院より發行することゝなりたるを以て、大村〔西崖〕教授は同院に就きて、上は推古天皇御宇より、下は慶應の末年に至るまでの千二百餘年間を飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、桃山及び江戸の七期に大別して解説を附し、又卷首に日本美術の沿革を概敍し、冊子は縱一尺六寸横一尺一寸の冊子とし、畫面は鮮明

なる寫眞版（内十數葉は精巧なる着色木版）にて印刷し、豫約出版（四月卅日締切）を爲す筈なるが、上卷は來る七月、下卷は十月刊行の豫定にて、豫約價は上製卅三圓、普通製二十六圓、英文解説の分三十五圓なりと云ふ。

○彫刻百選と建築百選　日本名畫百選は前項に記載したる通り、今回愈出版することゝなりたるが、猶本校にては古來本邦に於ける彫刻と建築の優秀なるもの百點づゝを撰拔し、其の撰拔稿本も既に出來し居る由なれば、是亦機を見て出版せらるゝことゝなるべし。

○東洋美術小史　本書は大村〔西崖〕教授の著述に係り、本邦は勿論印度支那の美術にも及ぼし、繪畫、彫刻、建築及び各種の工藝に渉り、簡明に説述せられたるものにして、本校豫備科講授用のために、今回別項記載の審美書院より發行することゝなり、目下印刷中なれば、遲くも四月下旬迄には出版せらるべしといふ。

○本年の新入學生　本年より豫備科入學の前に於て各科の志望を定めしめたるが、圖案科は募集定員に超過し、西洋畫科は定員の倍數以上にもなりたるを以て、四月中旬撰拔試驗を行ひて、入學を許否する筈なりと。

○依囑製作　兼てより鑄造中なりし、西村勝三氏の銅像は、此程鑄造を竣りたるを以て、來五月下旬迄には、向島舊櫻組の敷地へ据付を了るべく、目下は長岡中尉銅像の鑄造中なり。又竹内久一氏擔任の戰役紀念觀音銅像は、目下原型の製作中にして、こは出來の上は、遠州掛川城の天主臺に建設する筈なりといふ。

東京美術學校近事〔四―九。M・三九・六・七〕

○前號掲載後に於ける職員の動靜を錄すれば左の如し。

四月十四日、教授古宇田實氏は、學術研究のため、京都府及愛知縣へ出張を命ぜられたり。

同月十六日、雇會計掛森田國藏氏は、依願解雇せられたり。

同月十九日、教授大築千里氏は、大坂市にて開設せる、戰捷紀念博覽會出品審査官として、農商務省より出張を囑托せられ、同市へ出張せり。

同月三十日、囑托豐田兼吉氏は、依願解囑せらる。

五月三日、森田龜之輔氏は、本校雇を命ぜられ、英語科助手を申付けられたり。

同月十日、教授島田佳矣氏は、學術研究のため、大坂府及石川縣へ出張を命ぜらる。

○臨時休業と觀兵式　四月三十日は曠古の盛典たる、凱旋觀兵式を擧行せられたるを以て、當日臨時休業し、職員生徒一同青山御所前に整列して盛儀を拜觀し、又靖國神社の大祭に付、五月一日臨時休業せり。

○豫備科の入學者　本年の豫備科入學者は前號にも報じたるが如く、西洋畫科及圖案科は募集の人員に超過したるを以て、國語漢文、歴史（全躰）、用器畫法及實技の選拔試驗を行ひ、成績順により入學を許し、其他の科は無試驗にて入學を許したり。其科別姓名を錄すれば左の如し。因にいふ、選拔試驗の繪畫は、西洋畫科志望者には木炭畫にて石膏型を寫生せしめ、圖案科志望者には毛筆に

て櫻花を寫生せしめ、之に依りて、更に模樣を付せしめたり。

日本畫科志望者

田村寛二郎　大山　文吉　小菅敬左右　楠本　秀男
小原　丕〔續〕　戸部　隆吉　南部　茂　足立　季彦
富田　一昭　清島　長次　廣瀨峯太郎　大山　逸八
岡村　榮　土橋　三郎　篠原　圓次　高多　喜八
柴田健次郎　渡邊　泰輔　戸田　正夫　高橋　清六
井上　利正　伊藤　百助

西洋畫科志望者

庄子　勇　山口　亮一　御厨　純一　武井　樸介
大野　隆德　藍野　精一　我妻　榮吉　長澤　輝治
菊地　五郎　小寺　健吉　山田　清　原　勝四郎
井上　精一　諸澤　虎雄　吉村　芳松　佐野　貞雄
岩尾　重正　中野　營三　横井　禮一　人見　彌
建部　純夫　前山長次郎　大久保喜一　濱田　盛基
戸田　氏宣　鈴木　良治　島田　卓二　東　守七
富田溫一郎　茂呂　廷吉

彫刻科志望者

和田　季男　橋本久米二郎　富永　光一　鶴崎　乙也
入谷　昇　山田　勝　大藏　雄夫　齋藤　長德

圖案科志望者

千熊　宇平　幡野久太郎　神尾喜久司　西村小二郎
中井彌五郎　高橋昇太郎　小川　正雄　伊井彌之助
藤本　稔　廣瀨　寛治

金工科志望者

小源〔糸源〕糸太郎　海野　清　島田　健三　黑川　廣吉
北原　千祿

鑄造科志望者

水野熊次郎　今泉　與一　松平　顯治　太田　靜一

漆工科志望者

安部　然　大崎　和吉　菊池彌右衞門　小川　喬
木村　清　檜谷　長吉　飯森　健二

○美術祭紀念帳の發行　本校校友會に於て發行することゝなり居たる紀念帳は、種々の事情に依りて出版遷延（月報八號編輯餘錄に詳細記述あり參看せられたし）したるが、此程漸く出來したるを以て、本校に關係ある豫約者に配付したり。因にいふ同紀念帳は便宜のため、畫報社より發賣せるを以て、豫約せざる人にして希望の向は、本會々員に限り、定價の一割引（九十錢）となすといふ。

○圖畫の夏期講習會　此一兩年は日露戰役のため、本校に於ても夏期講習會の開設なかりしが、本年は文部省に於て之を開き、來七月二十五日より凡三週間、全國の普通教育圖畫教員を會し、本校を其講習會場となし、鉛筆畫、色鉛筆畫、水彩畫、圖按法の講習會を開く趣にて、一方に於ては、圖畫教育會は此好機を利用して、全國普通圖畫教育に關係せる學校教員の贊同會合を求め、圖畫教授上の研究と統一を圖るがため、來八月一日より五日間、圖畫教育大會を開設せんとし、其旨同會長より、府縣の中學、師範、高等女學校長へ照會狀を發し、圖畫教員を出張せしめ、並に當該校長の出演を求めたりといふ。されば我校出身諸氏は圖畫教育に關係の有無に拘はら

ず、此時機を利用して出京せられ、其道を研究すると共に、舊情を溫むる亦可ならずや。

東京美術學校近事〔四―一〇。M・三九・七・二十一〕

○前號掲載以後に於ける職員の動靜左の如し。

五月二十二日、教授岡田三郎助、同島田佳矣の兩氏は、本年夏期文部省に於て開かるべき、師範學校、中學校、高等女學校教員の夏期講習會講師を囑託せらる。

同月四日、雇增井兼吉氏は、戰役のため召集せられ、久しく韓國に在りしが、此日解隊せられたり。

同月十二日、教務掛兼庶務掛土屋軍治氏は文庫掛に、文庫掛藤岡福三郎氏は會計掛に、何れも轉勤を命ぜらる。

同月十五日、助教授岡田秀氏は、教員檢定委員會臨時委員仰付られたり。

○聖路易博覽會賞狀の受領　同會に於て本校の金牌を得たることは兼て報じたる所の如くなるが、去る五月廿二日其賞狀を受領せり。

○日本畫科の授業法改正　本年九月の學年始めより、教授上の都合によりて、日本畫科の授業方法を改むることゝなれり。即ち同科全躰を二つの教室に分ちて、本館、新館となし、本館は寺崎〔広業〕教授擔任し、結城〔素明〕助教授之を輔け、新館は下村〔観山〕教授擔任し、鶴田〔機水〕助教授之を輔け、川端〔玉章〕、荒木〔寛畝〕の兩教授は、從來の如く此兩教室を監督指導すべしといふ。

○漆工科教室教具改正の內議　同科は是迄本邦在來の作業樣の如く、教室は疊敷とし、座して稽古をなしつゝあれども、衞生の上より面白からざれば、寧ろ他の科の如く机腰掛の制に改めんとて、目下當局者は工夫中なりといふ。

○美術祭紀念帖の配付　校友會にて發行したる美術祭紀念帖は、豫約者へはそれ〳〵配付中なるが、猶少しく同會に殘部ある見込なるを以て、會員諸氏にして望みのものには、豫約價金五十錢（外に郵稅六錢）にて申込順にて配付すべしといふ。

○本校校舍及各教室の繪葉書　從來本校及各教室內に於ける授業の有樣は、實地に就きて之を見るより外は其途なかりしが、今回各教室の寫眞を縮寫して寫眞版となし、八枚を一組として繪葉書を作り、畫報社より發刋せしむることゝなりたり。代價は校友會會員には割引して、一組金十六錢とし、便宜のため校內の筆紙墨商靜一堂よりも發賣せしむることゝなりたれば、在地方の會員諸氏にして望みのものは、郵稅二錢を添へて靜一堂へ申込まるべしとなり。

東京美術學校近事〔五―一。M・三九・一〇・二四〕

○本校職員の其後の動靜を錄すれば如左。

八月三日、教授大澤三之助、助教授羽田禎之進、囑託關保之助の三氏は、各科卒業期生徒が、京都府及奈良滋賀の兩縣へ修學旅行をなすを以て、實地指導のため、出張を命ぜらる。

八月四日、文部省留學生の本校助教授櫻岡三四郎氏は此日歸朝せられたり。

八月二十日、助教授千頭庸哉氏は依囑製作事業に關し、往復三十日

間の見込にて、熊本縣下へ出張を命ぜられ。同月廿九日出發せり。
八月三十一日、雇（躰操擔任）手島儀太郎氏は、日本躰育會より米國留學を命ぜられたるを以て、此日願に依り雇を解かる。
九月五日、雇（會計掛）伊藤雄次郎氏は、腦膜炎に罹り、遠逝せられたり。
九月六日、柴一雄氏本校雇を命ぜられ、工藝化學科助手を命ぜられたり。
九月七日、臨時雇川合新助氏は本校雇（會計掛）を命ぜられ。赤間運藏氏も亦本校雇を命ぜられ、躰操科助手、兼教務掛庶務掛申付けられたり。
九月十一日、助教授津田信夫氏は、依囑製作事業に關し、往復四十五日間の見込にて熊本縣下へ出張を命ぜらる。聞く所によれば千頭氏津田氏の出張は故長岡中尉銅像建設のためなりといふ。
○生徒卒業　本年四月卒業期の際從軍其他の事故により、卒業を延期せられたるものにして、其後卒業したる諸氏左の如し。

日本畫撰科

六月二日卒業　多田　雄三　千葉縣平民

漆工科

九月三日卒業　吉田彌太郎　東京府士族
九月三日卒業　岡本　尙市　鳥取縣平民

漆工科撰科

七月六日卒業　澤口　悟一　宮城縣平民
八月廿日卒業　市島富太郎　新潟縣平民

○本科入學許可　豫備科修了試驗に合格したる左記七十三氏は、九月十一日より各其志願せる本科へ入學を許可したり。

日本畫科

楠本　秀男　小菅敬左右　小原　丕績　清島　長次
土橋　三郎　富田　一昭　戸部　隆吉　大山　逸八
高多　喜八　足立　秀彦　戸田　正夫　南部　茂
井上　利正　大山　文吉　篠原　圓次　柴田健次郎
高橋　清六　渡邊　泰輔　岡村　榮　廣瀨峯太郎
田村寛二郎　伊藤　百助

西洋畫科

藍野　精一　武井　樸介　山口　亮一　大野　隆德
濱田　盛基　佐野　貞雄　東　守七　菊池　五郎
諸澤　虎雄　中野　營三　庄子　勇　原　勝四郎
横井　禮一　小寺　健吉　鈴木　良治　建部　純夫
大久保喜一　井上　清一　岩尾　重正　我妻　榮吉
富田溫一郎　人見　彌　山田　清

彫刻科

齋藤　長德　入谷　昇　和田　秀雄　橋本久米二郎
鶴崎　乙也　大藏　雄夫　山田　勝

圖案科

高橋昇太郎　幡野久太郎　中井〔弥〕源五郎　藤本　稔
千熊　宇平　小川　正雄　伊井〔弥〕源之助　西村小二郎

金工科

北原　千祿　小糸源太郎　海野　清　島田　健三
黑川　廣吉

鑄造科

太田　靜一　松平　顯治　水野熊次郎

漆工科

大崎　和吉　飯森　健二　小川　喬　木村　清

安部　然

○特待生の選定　本校規則第二十八條に依り學業品行殊に優等に付、本年九月より一學年間の特待生に、左の十五氏を選定せられたり。

吉田　清二（日本畫二年）　武藤直信（日本畫四年）
山田　廉（日本畫卒業期）　田邊　至（西洋畫二年）
田中　良（西洋畫二年）　久米福衛（西洋畫三年）
太田喜二郎（西洋畫四年）　南　薫造（西洋畫卒業期）
小倉右一郎（彫刻卒業期）　古田立次（圖案四年）
君島金三郎（圖案卒業期）　岩崎文七（金工二年）
古川　茂一（漆工二年）　甲谷　公（漆工四年）
原田謹次郎（漆工卒業期）

○精勤賞狀授與　前學年中學業を精勵したる左の二十二氏へ、精勤賞狀を授與せられたり。但年級は前學年による。

竹田豐太郎（日本畫二年）　武藤　直信（日本畫三年）
久保　提多（日本畫三年）　坂内瀧之助（日本畫三年）
小村　泰助（同撰三年）　山田　廉（日本畫四年）
飯島保次郎（日本畫四年）　三隅禎三郎（西洋畫一年）
加藤　靜兒（西洋畫一年）　内田伴二郎（西洋畫一年）
上田　貞次（西洋畫二年）　斯波　義辰（西洋畫四年）
牧野　國助（彫刻撰一年）　相羽彦次郎（彫刻撰三年）
小倉右一郎（彫刻撰四年）　飯田德三郎（圖案一年）
原田　縫吉（金工撰一年）　神谷甚一郎（金工二年）
劍持　正行（漆工一年）　三木　榮（漆工一年）
高中　文助（漆工二年）　相馬　格平（漆工四年）

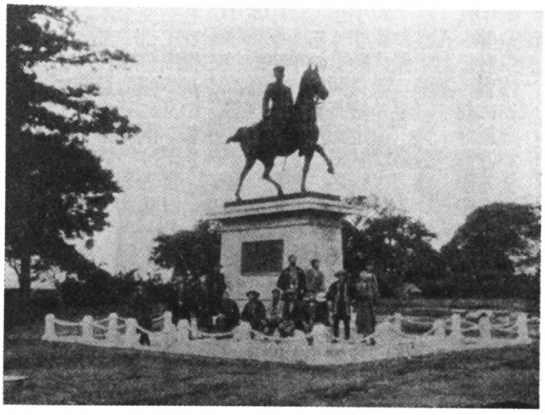
○本校文庫の移轉　本校にては舊帝國圖書館を借入れ、去七月茲に文庫を移轉したり。而して此三階煉化〔瓦〕造りの建物の方は圖書標本の置場とし、二階建の方は、階下を閲覽所に、階上を陳列所となすといふ。此の如く本校文庫も從來に比し、餘程好都合となりたるは、洵に賀すべきなり。

○島田〔佳矣〕教授の出張　同教授は例年の如く、長崎縣三川内陶器圖案傳習所の聘に應じ、八月初旬同地に出張せられ、九月十三日歸京せられたり。

○本校の依囑製作　目下本校依囑製作中の重なるものを記せば、左の如し。

故陸軍騎兵中尉長岡護全氏の銅像は、既に鑄造を了り、建設地へ廻送の準備中なるが、銅像建設地にては、九月六日を以て基礎工事竣成し、九月十五六日頃より、石臺の工事に著手するを以て、其監督のため千頭〔庸哉〕助教授の出張したるは、前項に記すが如くにして、据付のためには、津田〔信夫〕助教授出張のことゝなり、職工數名を率ひて、九月十八日該地へ向ひて出張せられたり。

松島清八氏の銅像は、高八尺、和服の扮裝にして、既に鑄造を竣れり、同氏は福井の羽二重輸出商にして、此原型は高村〔光雲〕教授主任として、彫刻科塑造教員諸氏の作に成りしもの、卒業生の杉本〔伝〕、竹内〔友吉または定吉〕兩氏も亦此製作を助けたり



依嘱製作　長岡騎兵少尉銅像　明治39年11月18日除幕式
（『東京美術学校校友会月報』第5巻第3号より転載）

といふ。古川久吉氏の銅像は、等身の洋装にして測量をなし居る風姿なり、是亦鑄造を竣れり、原型作者は前に同じくして、卒業生杉本氏助手たりしといふ。

朧銀製花瓶三對は、日本鐵道株式會社の依嘱に係り、同社より其社の功勞ありし人々へ贈るもののよしにて、高各一尺六寸許り、素地は藤本萬作、平田宗幸、黑川榮勝の三氏各一對づゝ擔當し、彫金は海野勝珉、中川義實、香川勝廣の三氏各一對づゝ彫刻する筈にして、圖樣は教授島田佳矣氏の考案する所なりといふ。

華族會館依嘱の飾棚は、華族諸氏より明治卅七八年戰勝祀念として　陛下御手元へ進獻するものゝよしにて、華族會館長德川公爵より依頼せられたるもの、十月中には製了の豫定にて目下製作中に係り、之に具する畫帖、置物、香爐、硯筥其他の小道具は、皆帝室技藝員諸氏の手にて成る筈、考案者は、岸光景島田佳矣の兩氏なり。今其作品名と、作者とを擧ぐれば、

飾棚（伊藤平左衞門氏）△畫帖、春（荒木寛畝氏、野口小蘋氏）夏（熊谷直彦氏、望月玉泉氏）秋（岸光景氏、今尾景年氏）冬（川端玉章氏、橋本雅邦氏）△畫帖裱裝きれ地（川島甚兵衞氏）△帖鎭（石川光明氏）△置物（高村光雲氏、竹内久一氏）△香爐（清風與平氏）△香合（清川惣助氏）△香盆（川之邊一朝氏）△硯筥（白山松哉氏）△水滴（香川勝廣氏）△印鈕（鈴木長吉氏）△印文篆刻（中井敬所氏）△印筥鏡（海野勝珉氏）△肉池（宮川香山氏）△刀子（宮本包則氏、月山彌五郎氏）△刀子鞘（並河靖之氏）

○夏季圖畫講習會　文部省の開設に係る本年夏期の圖畫講習會は、七月廿五日より八月十四日まで三週間、本校内にて開かる。課目は實技は鉛筆畫、色鉛筆畫、水彩畫、學科は圖按法にして、實技は岡田三郎助氏、小林萬吾の兩氏、圖按法は島田佳矣氏の擔任にして、毎日午前八時より正午迄授業せられたり。其會員は各府縣の師範學校中學校高等女學校の教員諸氏にて總員百〇二人、此内本校卒業生諸氏の出席者を錄すれば左の如し。

竹ノ下舊俊　丹羽五十吉　工藤　晨　石田　益敏
今田　直策　井上　良慶　川村　孝　谷　鐐太郎
江島五三郎　伊藤啓次郎　菅原　次郎　小貫　廉
吉田　金吉　飯尾駒太郎　佐藤健四郎　竹内　勝
山崎　競　平林　俊吉　今井　重信　野村　厚生
佐々木惣三郎　田中　寅三　大塚　泰　瓜生　英夫
山田　榮吉　廣川榮三郎　藤原美治郎　松本　弘
井芹　市次　山邊　知臣

右計三十人順序不同

○教育者大會　第一回全國圖畫教育者大會は、圖畫教育會の主催にて、去る八月一日より、五日間毎日午後一時より（日曜日は午前より）本校内の會議室（元校友會倶樂部）にて開かる。燬くが如き炎暑にも拘はらず、南は臺灣より、北は北海道より、來會するもの百八十餘名、なか〳〵の盛會にて、いと熱心に討論熟議せられたりしは、斯道のために洵に慶賀すべき會合なりき。

而して又同會にては參考圖書の陳列閲覽場と、圖畫成績及教具器具標本等の陳列場とを設けて、來會諸氏の參考に資せられたり。

猶此會の五日間に於ける議事等の主要なるものを擧ぐれば左の如し。

會長開會の辭
澤柳文部次官の演説
右にて式終り一同撮影
本部役員の披露
支部經營に關する會長の意見披露
各支部長の報告
中學校高等女學校の圖畫教授時間を增加するの件討議
中學卒業以上の程度に於ける各種專門學校入學試驗に圖畫を課するの件討議
小學教員檢定試驗に圖畫を課するの件討議普通教育に於ける圖畫に鉛、毛、鐵、の三筆を兼用するの得失及水彩畫を課するの可否討議
中等教育に於ける各種學校の圖畫教育上の意見及其細目（出席者演説）
教材及生徒用具供給に關する打ち合せ
右にて閉會

圖畫教育者大懇親會を午後六時より櫻館に開きたり

○送迎會　文部省留學生本校助教授櫻岡三四郎氏、實業練習生沼田勇次郎氏の歸朝せられたると、先頃雇增井兼吉氏の凱旋せられしを歡迎し、雇手島儀太郎氏の、躰育會より躰育研究のために米國へ留學を命ぜられたるを送らんがため、本校職員諸氏相會し、上野梅川樓に於て、九月十七日送迎會を開きたり。會するもの四十有四人、なか〳〵の盛會なりしと。

○日本名畫百選の出版　本校の選集に係り審美書院より發兌の筈となり居たる日本名畫百選は、此程其上卷を出版したり、なか〳〵見事のものにして、寫眞版なども從來のに比すれば鮮明なり。因にいふ同書の解説は大村西崖氏の筆に成るといふ。

○生徒の滿韓旅行　直轄各學校の生徒が、相携へて滿韓旅行をなすに際し、本校にても之に參加したるが、最初は三十餘名の希望者ありしかども、種々の事故によりて遂に西洋畫科の五島健三、寺崎武男、香田勝太、鑄造科の淺井定吉の四氏となり、七月十七日東京を發し、滿洲及朝鮮を經て、八月上旬恙なく歸京したり。

東京美術學校近事〔五―二。M・三九・十二・一五〕

○職員の動靜　其後の分を錄すれば如左。

九月十八日、教授海野美盛氏は、東京勸業博覽會賞狀及賞牌圖案調製を囑託せらる。

同月二十二日、沼田勇次郎氏（號一雅）は、本校雇を命ぜられ、金工鑄造兩科に於ける塑造の授業及依囑製作の原型を擔任せらる。

十月六日、助教授岡田秀氏は、三十日間の豫定にて、學術研究のため、福岡縣、大分縣、佐賀縣、熊本縣へ出張を命ぜられたり。

○大澤教授の留學　教授大澤三之助氏は、建築裝飾術研究のため、滿三ヶ年間英國佛國及伊國へ留學を命ぜらる。本邦を出發せらるゝは、明年一月十九日の豫定なりと。

○本校設置紀念式　例によりて十月四日午前九時より、構内會議場にて催さる、正木〔直彦〕學校長は一場の演說を試みられ、職員卒業生生徒の互に扶助し提携するの必要なる所以を述べ、また本校卒業生中に在りて、學術其他に特長を有せらるゝ關〔保之助〕、大村〔西崖〕、香取〔秀真〕、平子〔鐸嶺〕、早崎〔梗吉〕其他の諸氏を紹介せられ、後茶菓の饗應ありて散會せり。當日職員生徒はいふも更なり、在京卒業生五十餘名も來會せられたり。

○修學旅行　天清く氣澄み、楓葉霜に飽くの好季を卜して、修學旅行をなすは毎年の例なるが、今年もまた十月二十七日より十一月一日まで六日間、山梨縣靜岡縣へ旅行したり。今其梗概を記せば、十月二十七日午前七時五分、一同飯田町停車場より滊車に搭じて甲府に至る、時に十二時を過ぐる四十五分、それより徒步して和田峠を超え、勝を探り奇を尋ね、薄暮御嶽に着して一泊し、翌廿八日は隨所に風景を寫生して甲府に出でゝ宿り、廿九日甲府を發し石和町を過ぎり、御阪嶺の嶮を超えて河口船津に分宿す、此日は行程八里に餘り、加ふるに御阪の峻路ありしが、其頂上に於ける富嶽と河口湖との觀望は、人をして思はず快哉を呼ばしむ。翌三十日は富士山北の登山口なる吉田に宿す。明くれば三十一日、數日來の晴天に引替へて朝來陰雲天を蔽ひ、八時頃より雨さへ降り出したり。甲駿の境なる籠阪峠を超ゆる頃は雨ます〳〵強くなりしが、正午頃より雨の歇みたるは一同の幸福にして須走に至りて宿す。思へば此日は一日にして二州の旅をなし、二州の雨に降られたるにてありけり、何となく面白き心地ぞする。十一月一日は朝來快晴、須走を發し、御殿場に至りて滊車に搭ず、時に五時十八分、箱根を過ぐる頃、陰曆九月十五日の月は、影黑き山の端より出て、清光晝の如く、宛も一行の歸京を迎ふるが如きは誠に心地よきことなりき。此の旅行中にありて、石和町に於ける鶴田〔機水〕助教授の御實父なる親眞氏が、一行を迎へて饗せられたるの厚意と、船津村に於て、渡邊兵次郎氏が、自ら進んで一行中西洋畫科二十三人の生徒と職員數名とを宿泊せしめられたるの篤志とは、一同の深く謝する所玆に記して聊謝意を表す。

○三海將銅像圖案の受賞　先般來三海將銅像建設委員長東郷大將の手元に於て東京彫工會員、本校關係者其他の人々より、縣賞にて募集中なりし、西郷元帥、川村大將、仁禮中將の三海將銅像の彫刻原型圖案は、十月七日海軍大臣官舍に於て審査を結了せられたるよしにて、同月二十四日其結果を發表せられたり。乃左の如し。

西郷元帥分

壹等　賞金參百圓　本山白雲氏（本校卒業生）

川村大將分

壹等　賞金參百圓　本山白雪〔雲〕氏（本校卒業生）

貳等　同　百圓　畑　正吉氏（同）

仁禮中將分

壹等　賞金は折半して左の二氏へ與へらる

金百五拾圓　田中雄一氏（本校卒業生）

金百五拾圓　朝倉文夫氏（本校生徒）

貳等　賞金百圓　山本鹿洲氏（本校卒業生）

同　百圓　本山白雲氏（同）

同　百圓　毛利敎武氏（同）

右規定賞金の外特に左の四氏へ金參拾圓宛を與へらる

西郷元帥分　後藤　良氏（本校卒業生）

同　海野美盛氏（本校敎授）

同　竹内定吉氏（本校卒業生）

仁禮中將分　杉本　傳氏（同）

○職員の戰役敍勲　明治三十七年戰役の功により、結城〔素明〕助敎授は勲七等瑞寶章及金百五拾圓を、千頭〔庸哉〕助敎授は勲七等青色桐葉章及金參百圓を、雇增井兼吉氏は勲七等青色桐葉章及金貳百五十圓を、孰れも四月一日付を以て授けられたり。

○卒業生の敎員檢定本試驗合格者　本年十一月文部省に於て施行せられたる、師範、中學、高等女學校の圖畫科敎員檢定本試驗に合格したるものゝ中、本校卒業生諸氏の合格者左の如し。

毛筆畫用器畫科

圖畫講習科修了生　淺井重一（大坂府士族）

日本畫撰科卒業生　佐治友八（福島縣平民）

鉛筆畫用器畫科

西洋畫撰科卒業生　大八木一郎（京都府士族）

○本校文庫閲覽時間の改正　從來本校文庫閲覽時間は、午前八時より午後四時迄なりしが、斯くては生徒にありては授業中の時間を圖書閲讀に費し、職員卒業生にありては畫〔畫〕間業務多忙の時間を費す等遺憾少からざるものあるを以て、其不便を除かんがため、來十二月一日より閲覽時間を夜の九時迄延長し、且毎月一日十五日の定期閉鎖日を廢することとなせり。

東京美術學校近事〔五―三。M・三九・十二・二八〕

○職員諸氏の陞等　本校敎授黑田清輝、荒木寛畝、石川光明、竹内久一、海野勝珉の五氏は十二月一日各高等官三等に陞敍せられ、岡田三郎助、和田英作の兩氏は、同日各高等官五等に陞敍せられたり。

○職員の辭職　雇（文庫掛）土屋軍治氏は、病氣のため十一月二十九日依願雇を解かれたり。

○職員卒業生生徒諸氏の敍勲　明治三十七八年戰役の功により、頃來敍勲賞賜せられたる諸氏左の如し。次第不同。

功五級（年金三〇〇）旭六步中尉　羽田禎之進（職員）

功五級（同）　旭五同　石井吉次郎（同）

旭五（一時金四〇〇）　步少尉　赤間　運藏（同）

旭六（同　二五〇）　步大尉　大澤三之助（同）

旭六（同　四〇〇）　步中尉　木村信太郎（日卒）

功五級（年金三〇〇）旭六同　佐藤榮三郎（同）

旭六（一時金三五〇）　同　鈴木武之助（同）

旭六（同）　同　加藤　一郎（同）

功五級（年金三〇〇）　旭六同　故羽生　道也（同）
功五級（年金三〇〇）　旭六歩大尉故木村　良吉（同）
旭六（賜金不明）　歩中尉故後藤　矩一（同）
功五級（年金三〇〇）　旭六同　故氏家　靜修（漆卒）
旭六（一時金二五〇）　同　平井　富夫（日卒）
旭六（同二〇〇）　同　高城　次郎（同）
功五級（年金三〇〇）　旭六同　小出魯一郎（同）
瑞六（一時金二〇〇）　砲少尉　清家　恕（同）
旭七（同一八〇）　歩軍曹　野口　駿尾（同）
旭六（同四〇〇）　歩少尉　大智　恒一（同）
瑞六（同一八〇）　同　秋野　外也（同）
功五級（年金三〇〇）　旭六歩中尉　中西　乾（圖卒）
旭五（一時金四〇〇）　歩大尉　鈴川　信一（日卒）
功五級（年金三〇〇）　旭六歩中尉　中村　直彦（彫卒）
功五級（同）　旭六同　淺野勇次郎（同）
功五級（同）　旭六同　賴富　新吉（同）
功四級（年金五〇〇）　旭六工中尉　望月銃三郎（金卒）
旭六（一時金四〇〇）　歩中尉　玉井　正申（漆卒）
旭五（同二五〇）　同　竹内　次郎（日卒）
旭五（同六〇〇）　歩大尉　高橋　政美（日卒）
旭六（同四〇〇）　騎中尉　山崎　勇馬（日卒）
旭六（同二五〇）　歩中尉　山本　昌（同）
瑞六（同一八〇）　歩少尉　藤井　豐（同）
瑞六（同）　同　西　伊三次（西卒）
瑞六（同二〇〇）　同　和田　季雄（彫生）
旭七（同二五〇）　二等看護長　森山驥三郎（日生）

備考　本文姓名下（日卒）は日本畫卒業生を示す　其他之に倣ふ。

○外來者の本校文庫閲覽　本校文庫は前號に記したる如く、十二月一日より閲覽時間を午後九時迄延長し、職員卒業生生徒は勿論、斯道の篤志者にして、望みの者には、閲覽せしむることゝなりたるが、職員卒業生生徒の閲覽は從來と異らざれども、篤志者は如何せば閲覽するを得るかとの問合もあれば、此に之が順序を記さんに、其希望者は先ず本校門衛、文庫掛、庶務掛の中に備へある、所定の願書に記名調印して之を文庫掛に差出すべし、本校に於て願書を許可したる者には、閲覽票を交付すべければ、常に之を携帶して出入すべきものなりといふ。

○依囑製作　本校にては來年上野に開設する、東京博覽會出品の日本橋模型の上に据へらるべき、太田道灌、德川家康の塑像製作方を東京市より依囑せられ、目下彫刻科に於て製作中なり、其高さは凡そ四尺、道灌は狩裝束、家康は甲冑を着するの像なり。

○永島三郎氏の卒業　本年四月事故に依り卒業試驗を延期せられたる、鑄造科の永島三郎氏は、去る十一月二十六日卒業せられたり。

○撰科生の入學　去る十月撰科生入學試驗合格者中より、本校各撰科へ入學を許したるもの左の如し。

日本畫撰科（受驗者二十四人）

江森　天壽　森山驥三郎

西洋畫撰科（受驗者三十人）

田中　塊一　瀬戸　近　。李　岸
。曾　延　年　△デー、スワンカール、ラーチ
彫刻撰科（受驗者九人）
關野金太郎　加藤　常一　鹽澤角之助
富永　光一　小野眞山戸　。談　誼　孫
金工撰科（受驗者二人）
本野　義盛
鑄造撰科（受驗者三人）
荒岡　七次　時岡鐵次郎　南　治一
備考　○印は清國人、△印は印度國人なり

関連事項

① 日本画科の授業法改正

342頁所載記事のとおり、日本画科では明治三十九年九月より実習授業の形式を改め、従来の学年制から教室制へ変更した。学年制、つまり学年ごとに担任が代わるという形式は各教官の作風や教育方法に違いがあるため、生徒の修学に混乱が起こりかねない欠点があつたので、三十九年に至り、ロンドン留学中であつた下村観山と日露戦争で入営していた結城素明が学校に戻り、人員が揃つたのを機として教室制、つまり教室を分けてそれぞれ担当教官を定め、一貫性のある指導ができる形式へと切り替えたのであった。これによって日本画科は本館教室（寺崎広業、結城素明担任）と新館教室（下村観山、鶴田機水担任）とに分かれ、川端玉章と荒木寛畝は顧問格で両教室を監督することとなった。生徒に教室を選択させた結果、本館教室六十余名、新館教室五十余名という、ほぼ均等の比率を得た。恐らく学校当局はこの教室制によって広業と観山に大いに指導性を発揮させ、教育成果をあげようと期待したのであろうが、これより二年後には観山は早くも辞職してしまう。この三十九年に、壊滅状態に陥っていた日本美術院は茨城県五浦に移り、そのため観山は五浦と美術学校を掛け持ちするかたちとなったが、結局彼も五浦に引き籠って大観、春草らとともに画業に専念することになるのである。

なお、川路誠（柳虹）はこの当時の生徒であり、「画壇今昔記」㈤（『現代美術』第一巻第五号、昭和九年八月）に日本画科在学中の思い出を綴っているが、教室制に触れた部分があるので次に転載しておく。

東京美術學校

京都から自分が上京したのは明治四十一年の三月だつた。繪をやめて文學へ轉向しようかと思ひ早稻田へ入るつもりでその試驗の準備などもしたが、一方に美術をやる氣もあり、それには不合理な日本畫を捨てゝ洋畫に就くに若かずと考へてやはり美術學校の洋畫科の入學試驗をうけることにした。

はじめて上野公園の美術學校の門を潛つた。黑い門があつて爪先上りに前庭を登つたところに白亞の二階建洋館が見える。これが今の記念陳列館の邊にあたるかと思ふが、古い人なら誰しも記憶にある有名な東京美術學校の建物だつた。今のやうに眞中に道が出來て美術部と工藝部と分れて二つになつたのは僕らが卒業す